

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	常夏國日記（壹の巻）
Author(s)	熊谷，覺行
Citation	龍南會雜誌， 1 5 9： 4 3 - 4 9
Issue date	1915-12-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6525
Right	

の上の皺は大分深くなつてゐたけれども昔の面影は猶ほ依然として存して居た。

彼は私と摺り違ひ様、彼がいつもしてゐたやうに細長い眼をしばたふきながら

『おぢや。何處か此の近所に葬式の家やねわか知らんかな』と尋ねた。けれども私は彼の顔を見つめた儘で何の返答もせなかつたので彼は、その、その、と行き過ぎて了つた。

私は何時でも私の故郷を回想する時は幼年時代を回想し、それに開聯していつも半十を記憶の底から識域上に呼び起さぬ事はない。

あゝ、彼が其の時私に與へた疵——此の額の上に殘つて居る此の疵は、これから先私がどんな生活をしようど、どんな立派な出世をしようど、猶ほ、永遠の彼が記念として永久に私の額と心に残つてゐる事だらう。

(完)

常夏國日記 (壹の卷)

一、三、兩 熊 谷 覺 行

南洋のいへづこには文こそ、このたまひし水田先生に、この醜き日記を捧ぐ。

|| はしがき ||

十字星の輝く南の空へ萍の波に搖られて三千里、夏虫の聲よりほかに訪ふ人もなき常夏の國こそは、詩の郷か、歌の境か。秋知らぬ樹々の梢を緑いと濃く吹く風ばよろず代を歌ひ、絶ゆる時なき紅の花、四時豊なる

黄金の果は太平の野を彩り、見るもの聞くもの歡天喜地の象ならざるはなし。

逝く春に濡ちし袖はなけれど、來ん秋を詠せん文はなけれど、生れながらのやは肌を、おしげもなく人の見るにまかせて、夏蔭の涼しき朝、月影の身にしむ夕、戀に生れ、戀に活き、戀に死にゆく人なんうらやましき限なる。

あはれ死して樂土に生れんとも、いかばかりか今の世の忘れがたくありなんかし。

おのづから成りいづる飯の有り餘りたれば飢を廢にしのご人もなく、世はこぞりて慾心なければ耳洗ふ川もなし。購ふものもなければ黄金も砂礫にひとしく、着る時もなければ錦繡も落葉にことならず。たとひ綾羅の衣を飾るとも、野に咲く百合の一本だにも及ばざれば、生れし儘の装ひの優にまぶしく見ゆと知りてのことなる可し。

われ此の國に遊びて、つらく思ひ返しけるは、このゆかしき人ごちの、天地とどこしへに、かくあるがままにあれかしとなん。

美しき夢に抱かれて、心ゆくばかり眠れる幼児の、おのづと乳の香に目醒めてたらちねを戀はんまでは、神もなく、罪もなく眠らしてん。

己が心をこよなきものと思ひ誤れる世のはしたなき人々よ、汝も亦いにしへはかく清かりしものを、慾を覺わて罪深く。理を知りて苦惱絶えずなりぬ。されば慾もなく。惱もなく。いとやすらけき此の人々の心を、な威しそ、な醒しそ。

戀の國には理はなくてありなん。詩の郷には學び草はなくてありなん。

|| 船 ||

加賀百萬石の船にうちのりて。追濱の浦を夏衣のままに立ち出づれば、潮路遙かに、波は八重七重にはてもなし。來し方の山々は、はかなくも波の花と消ゆきて、涙ぐめる夏雲のみぞ故里のかたみなる。あはれこの時こそは吾れにも情あることを知りしか。

大君の邊にしあれば水漬く屍もいとめでたし。たゞかりそめの旅にこの洋渡らんこと、父母ある者のなすべきことかは、と怪しみ迷へどもせんすべもなし。

日は暮れぬ。波は荒らかに。銀河のみ凄し。

人は黙して臥しぬ、黙して又起きぬ。たゞ吐息のみ此所彼所に聞ゆるは人も同じ心にてやあるならん。

さはあれど、乗りたる船は、思ひ定めたるけしきにて、檣もてむらがる星をかき亂しつゝ、南へ南へと闇の帳を推し開きつゝ進めるぞ心強き。

|| 小笠原島 ||

さすがの太平洋も、遠目にはまろびてもみたき青稻田、その田守る賤がはなれ家にも似て小笠原島いとかし父島、母島、兄島、弟島、姉島、妹島、はては、まぶしげに紅だすきたる嫁島ごち、睦まじく波間に集へるは、此の秋の豊に、饒はしきを語りて喜びあへるにや。

|| 海 ||

み空の色の照る日の光に溶けて流るゝにやあらん。はてしなき水は美しくも碧、瑠璃として澄み渡れり。今の世の新しい女繪師の見たらんには、玉の肌のこの色とともに溶け果てんことをこそ願ふらめ。

なみぎまの女さへも、此色を夏衣に染めなして着たらんには、なご惚々しく眺め入るなるべし。

なぎたる大海原には、波はなけれど、うねりいふとし。百萬石の吾船も、上ぎまに下ぎまに、後に前に、目の眩むまでに揺れしきるさま、美寐みさいせる關取のいみじき腹の上を這へる白虫の思ひやられて、をかしかりぬ。

夜つぎ日つぎ、船はひたすぎに波を渡りて、天津日の麗らかなる晨、木も草も、人も言の葉も異様なる地につきぬ。これなん名もゆかしき彩帆サイバン島なりき。

|| 南京玉 ||

歳間へば夕の空の星七つ。振分髪も肩越さぬ彩帆サイバンの乙女は美しかりき、水晶屈原の醒めたる色にはあらねど、瑤瑤淵明の酔へるが如き貌の、耳の端飾る金環は、うち笑むごとに微に光れり。

はにかみつゝも慕ひ寄るさまの、いちらしくありければ、暑き日の午過ぎを、椰子の木蔭涼しき海邊に唯二人遊びし時なりき。われにうながしつゝも、みづから張りしめし絹糸の聲とて『君が代』もしく『龜よ』などいと巧に誦じ、他の歌教へ給へと膝に纏ひつきければ、あはれに覺て『螢の光』を聞かせけるに、賢きかな稚兒は二度三度にて暗んじ終へぬ。

今年の睦月、はじめて大和言葉を聞きそめて、六月の今日、かくも妙へに歌ふを聞きてわれは涙ぐみぬ。行く川に香を流しつゝ咲く浮花の、昨日は『らいんの森』を無心に誦じ、今日は『君が代』を聲高らかに歌ふ心の哀れと思ひてか、訪ふ人もなき率土の濱の乙女さへかくもちから強く『君が代』を稱へ得る心根のゆかしくてか、固く抱きし乙女の貌にともごもなく熱き涙のそよぎかゝりぬ。

此のつぎに來たまへる時には琴たまへなご云ひしあごけなき乙女は、わが老いたらん後の夢の枕邊に立ちて、なご來まさぬ、なご怨むなるべし。

文使せし雁ならば又見ん時もあるものを、君は野に咲く月見草、吾れは雲間の時鳥、奇しき縁の末知るものは月より他によもあらじ。

されば吾が幼き時の思出を、糸につなぎし色玉のかすくは、おぼろに光る南京玉の指輪となりて乙女の薬指に残れども、あはれ、とこしへに相見ん時もあらばこそ。

なつかしき『あんどにお、しむしおん』よ、細く輪にせし南京玉の縁の糸は切るゝとも、紅に縁に紫にとゞめなくこぼれし若き旅人の熱き涙をな忘れそ。

船は動きぬ。小さき乙女は渚に人形のごと動かざりき。

Ⅱ 雲 Ⅱ

美しきものゝ極は雲なりけり。白鳥の水に浮べる千斷雲。黒髪をかきさばきたる雨の雲など、何れか美しからぬ。

されど姿のめでたきは雲の命にはあらず。雲の美しきは其の色にあり。色の美しきはその移りゆく刹那々々こそこよなきものなれ。

佳き人の情に動く刹那の貌のあでやかさも、なご及びなんや。花の紅も、柳の緑も、たゞ紅きのみ、たゞ緑のみ、京人形のいつも笑めると異ならず。

あはれ美しきものゝ極みは移りゆく刹那の雲の色なりけり。

雲におくられ、雲を迎へて、徒然の船の旅路の朝な夕なに、心ゆくばかり雲を賞でしはまたなごころなりぬ。
月は未だ高く輝けるに、東雲、ほの白うなりて、合歡の花のおぼろに咲き亂れたるにも似たるかな。

またたくひまにも移りゆく雲の色は、卯の花、八重櫻、菜の花、藤紫と咲き満ちて、きらびやかなる菊花の園と匂ひ競ふ頃は、酉の空は夕顔の花とともに月も満みていとあはれなれど、東の空はこよなう麗らかに躑躅の花は目も眩みて燃え出でぬ。

日は未だ出です。波は眠より醒めず。たゞ雲のみは、五節の舞に心をそそぎ、あるは青海波をいと巧みに舞へり。

さる程に黄櫨染の御袍ゆたかに、高御座に登り給へる 龍顔もかくやと覺ゆるばかりに、黄赤に燃ゆる花雲の中よりは、純白の朝顔の花の、音もなく咲き出でし心地して、千糸萬糸の光におのづと目つぶるゝ時、浩浩蕩々たる大海原の波は、波より波に歎の聲をあげて、ごよめきわたれる、嚴の極なりき。

吾等が糝にとて伴はれたるにはあれど、雞は更なり牛こそ哀れなりけれ。昨日よりは雞は影だに見えずなりて、曉の何となく淋しきに、如何なる縁ならん哀れの牛は、過ぐる日戀しき母を失ひ、今日はまたいとしき妻の地獄のさまを目のあたりに見て、己が命も笹の葉の露とや覺りけん、夕暗に消えゆく聲もうち凋れて、腸を斷つ思ひぞするなる。

此夕なりき。殘んの光、海一面を血に染めて、空には雲の影さへ見えずに、墨汁のひとしづくをうちこぼしたるごとき雲、はたと水のきはに現はれぬ。

雲は油を水に點したる様にひろがりて、頭となり體となり、角さへいかめしく成りいでて、猛り狂へる

牛の姿とはなりぬ。見る／＼二疋は八疋となり、十は千となり、果ては數知れの黒牛の群は、血にまみれたる形相恐ろしく、面うちそろへ吾船めがけてひたはしりに走り寄るさま、身の毛もよ立つばかりなり。折しも船上の牛の何思ひけん一聲高く叫びけるが、奇しきかな其の聲につれて天上の群牛は互に叫びかはし、空を覆ふ一つの黒牛となりて船を包み、目に怨の相を現じ、口に紅の炎焰を吐きつゝ、柱の如き雨の足は、船も碎けよとばかりに降りに降りて、凄まじきこといはんかたなく皆人色を失へり。

兎角して一陣の風涼しく吹き寄せて雨は止みたれど空趨る怪しき群牛はなほも吾船を睨めつゝ飛び交はせり月の出づるや、これらの怪しき姿は、おとなしやかなる白牛となりて月の都に消に去りぬ。

人は驟雨となん云へり。されどあれは殺されし數多の牛の靈のかくなり出でしにはあらずやと今も折ふし思ひ出づるなり。

たゞ此時ばかりは、雲の美しさを賞づる暇なかりき。

都洛島は何處か。海邊の影だに見ねば未だなかくに遠きにやあらん。

(壹卷の完)

— 四、十二、五、稿、—